

伊勢物語古注釈と『井筒』——有常娘像の変貌

飯塚 恵理人

一

謡曲『井筒』は、伊勢物語の古注釈を題材としている。これを最初に指摘したのは表章氏¹⁾で、

「徒なりと」の歌は、古今、春上に「詠み人知らず」として見えており、伊勢一七段の文意から見ても作者の「あるじ」はむしろ男であるが、伊勢物語知頭集には「いゑあるじは有常がむすめ」と明言している。

という形で『伊勢物語知頭集』の影響があることを指摘された。次に香西精氏²⁾は、二三段の女性を有常娘としない『伊勢物語知頭集』に対して、それ以外の典拠として『伊勢源氏十二番女合』(以下「女合」)・『伊勢物語注』という冷泉家流の古注の存在を紹介された。次に伊藤正義氏³⁾は、その冷泉家流の注を「古注」として紹介・吟味され、

「井筒」が伊勢物語二十三段の他に、十七段と二十四段の歌を引用しているのは、決して恣意ではないのであつて、そこに有常の娘によって一貫される作者の構想が生きているのであり、そ

してそれは、「古註」の説をふまえる作者の伊勢物語享受の相を反映しているのである。

と一七段・二三段・二四段を引用することに「有常の娘によって一貫される作者の構想」があることを指摘された。堀口康生氏⁴⁾は、伊藤氏(前掲)を受けて、三年間の夫の帰りを待ちわびて新枕をし、その晩に帰ってきた夫を追いかけて結局死んでしまう女性を主人公とする第二四段の和歌が引用されている点に注目され、「この女のイメージを、「井筒」一曲にぜひ加えなければならぬと思う。」と言われる。この伊藤氏・堀口氏の説に關しては西村聡氏⁵⁾が、有常娘の靈の出現について「『伊勢物語』二十四段のような彼女の死を決定づける事件が出現の契機となつたのではない。」と、二四段を有常娘によって一貫する作者の構想の一部とすることに疑問を示されている。

この二四段を『井筒』の有常娘像と関連させるか否かの問題点の一つは、伊勢物語の本文に、主人公の女性が「そこにていたづらになりにけり」と死んでしまふと書かれている点にある。そして伊藤氏・堀口氏・西村氏とも第二四段で有常娘が死んだと解釈される。しかし、三氏が典拠の参考として用いられた『冷泉家流伊勢物語抄』

の第二四段について、片桐洋一⁷⁾氏が、

有常娘をここで死なせてしまうわけにはいかないからか、「そこにていたづらに成にけりとは、死たるには非ず。業平のふり捨てて行くを見て、いたむまじき顔になるをいふなり。さればいたづらなり」と注して、

と有常娘が実際に死んだのではないとする説が載ることを紹介されている。

また、伊勢物語を各章段ごとに解説している古注釈の有常娘が登場する章段を挙げると、

〔和歌知願集（書陵部本）巻二一五〕⁸⁾（五六）一・一〇・一七・

一八・一九・四四・一〇七（七章段）〔以下「知願集（書）」〕

〔和歌知願集（書陵部本）巻六〕⁹⁾（三五）一・一〇・一七・一八・

一九・二〇・二二・二四・三三・三九・四一・四四・五

〇・一〇七（二五章段）〔以下「知願集（書）」〕

〔和歌知願集（島原文庫本 巻中・下）〕¹⁰⁾（五五）一・一七・一八・

一九・二二・二四・四一・四四（八章段）〔以下「知願集（島）」〕

〔冷泉家流伊勢物語抄〕¹¹⁾（〇）一・一〇・一七・一九・二〇・二

三・二四・三三・三九・四〇・四一・四三・四四・八六・八

七・一〇三（二六章段）〔以下「冷泉抄」〕

〔定家流伊勢物語註〕¹²⁾（四）一・一〇・二〇・二三・二四・三三・

四〇・四一・八七・一一六・一一九・一二三・一二五（二三章

段）〔以下「定家流」〕

〔彰考館本伊勢物語抄〕¹³⁾（七六）八六・九四・九五・九六・一〇

三・一〇七・一一〇・一一二（八章段）〔以下「彰考」〕

となり、「或説」という形で有常娘とされているものを含む。へん内は注釈を欠く段の総数。右記の古注釈の全てで有常娘は姉妹とさ

れ、姉が業平妻となり、妹はいやしい男の妻となったものとされる。但し「女合」は業平の妻を妹（三番左、有常女君）、いやしい男の妻となったのを姉（九番左、有常娘姉君）とする。また「彰考」は一段から七六段までを欠くが、有常娘を養子花子・二女・三女・四女・潔子と四人（九六段「有常が乙女」をこの四人以外とする）五人が登場させる。ここで挙げるのはどの注釈についても姉妹のいずれかが登場する段である。『井筒』に用いられている以外の章段・第二四段以降の章段について有常娘が多く登場している。

また、西村氏（前掲）は、『たとえば書陵部本『和歌知願集』では、有常娘を女主人公と見る各段で「なまいろこのむ女にて」（一段）とか「この女は、かぎりなくなまいろこのみをとて、こ、ろさだまらず」（十段）とか、「（男と女）たがひにしのびありきすとて、いろ／＼しき心のあだくらべしければ」（十八段）とか、また島原文庫本『和歌知願集』でも、「おんないろこのむものにて」（一段）とか「おんなにふたご、ろあり」（十八段）とか、両書は彼女を好色な浮気女としてとらえ、それゆえ二三段の「貞女」を有常娘のこととはしていない。と、『井筒』の有常娘がもつ「人待つ女」という面以外に、「知願集」では「あだなる女」という面をもって描かれていると述べられる。古注釈における有常娘像と『井筒』における有常娘像は若干異なる面があると考えられるのである。

本稿では、まず『井筒』に用いられている伊勢物語章段について古注釈を吟味する。次に『井筒』に用いられていない章段で、古注釈が有常娘のこととする章段を吟味する。これらの作業から、古注釈と『井筒』との有常娘の描き方の相違を明らかにし、同時に世阿弥が『井筒』において有常娘をどのように造形しようとしたのかについて考察したい。

二

『井筒』の伊勢物語が引用されている部分を『謡曲集』上¹⁴の小段番号によって挙げる、

前場 4サシ、「その頃は紀の有常が娘と契り、妹背の心浅からざりしに、また河内の国高安の里に」から4クセ、「筒井筒の女とも、聞こえしは有常が、娘の古き名なるべし。」までに第三段。

後場 8サシ、「徒なりと名にこそ立てれ桜花、年に稀なる人も待ちけり、かやうに詠みしもわれなれば、人待つ女とも言はれしなり」に第一七段。同小段、「われ筒井筒の昔より、真弓槻弓年を経て、今は亡き世に業平の、形見の直衣身に触れて」に第二四段。

10□、「月やあらぬ、春や昔と詠めしも、いつの頃ぞや。」に第四段。

となる。第四段の「月やあらぬ」は、有常娘が「昔男に移り舞」をしている部分であり、業平が乗り移っているという設定での詞章であるから、他の有常娘が業平と過ごした昔を回想する部分とは性格が異なる。そこで、この四段については考察から除外し、まずサシ・クセに長く引用され、有常娘の回想の中心をなしている第二三段の「筒井筒」について、次に第一七段・二四段の順に吟味したい。なお「知頭集」は断わらない限り(書)を代表して引用し、必要に応じて(書六・鳥)を用いる。

第二三段を有常娘の事とするのは、「冷泉抄」「定家流」「女合」である。「冷泉抄」で、その部分を引用すると、

る中わたらひしける人の事とは、阿保親王と有常と大和国に住ける時、春日の里にツイちをなして住ける時の事也。○子どもとは、有常が娘と業平と、おさなかりし事也。

となる。「女合」の有常娘の部分には、

か、ればにや人のくに、人もとめてまかりかよひけるに、女もはたおなじこゝろに、いでたちやりなどすめれば、おとこいぶかしようおもひけるが、又いぬるかほして、ものゝくまに○ずみみければ、いとようけさうじて、夜ふくるまでことかきならし、うらみくひて、ぬとて、

「風ふけば興津しらなみ」の歌を詠んだとあり、これも第二三段を有常娘のこととしている。「知頭集(書)」では、この章段を、

風、この物語は業平の事にはあらず。はるかにふるきよのものがたりを、これにかきまじへたる也。この哥どもは、万葉集におほく、よみ人しらずにていりたり。これをしらざる人は、まよひて業平の事とて、やうくの儀を申とかや。おかしくこそ侍れ。

と、男を業平とする説があることを記しながら、業平よりも古い世のこととしている。この章段を有常娘のこととする点は、香西氏・伊藤氏の言われる通り、世阿弥は「冷泉抄」等をふまえていると言えるだろう。

第一七段は、なかなか訪れなかった人が、桜の花盛りに来たのに対して主人が歌を送る内容である。この主人を有常娘とするのは、「知頭集(書・書六・鳥)」「冷泉抄」である。「定家流」は「アルシト云ハ有常アタナリトノ哥ヲヨム也返ハ業平」と、第一七段の相手を女性ではなく有常とする。

『井筒』の8サシの「人待つ女ともいはれしなり」に相当する古

注釈の語句として、「知顯集(書六)」に「さくらに人まちえたる女有常がむすめ」とあるものが挙げられる。古註の時代に有常娘が「人待つ女」という面をもった女性であるというところえられかたをしていることが確認できる。但し、同じ「知顯集(書)」は、「風、これは紀有常がむすめを、業平すさめてかよはずなりて、」と、業平が有常娘を「すさめ」て通わなくなったのだが、その主(有常娘)が送ったとされる「あだなり」との歌の歌意を、

我をば、あだにさだまらずといふそらことをいひつけて、うとみたりしかども、さだまりたる心なればこそ、けふまでおともせず、ひとりありて、もとおとこをば、まちつけたれ、とよめる也。

と、業平が通わなくなった理由として「あだ」であるという噂のあったことが裏に込められていると解している。また、返しの業平の「けふこそは」の歌の歌意を、

我けふとくきたればこそ、おのれがおとこなきはみつれ。いましばしおそくだにきたらば、おとこはしてまし。たとひ、こをばさらで、世中にありとも、わがものとは見じと也。

というもので、有常娘に他の男がいないことを認めながらも、遅く来たならば男がいるだろうと解している。「冷泉抄」では、

年頃音づれざりけるといふは、業平宮仕に京へ行て、彼二条の後の事故に、東山に押籠られて、三とせこねば、年比と云也。

(中略) 哥の心は、花は七日に散てあだなれども、今までちらぬは年にまれ成人を待てちらざりけりと云也。

と、業平が有常娘の所に通えなかったのは、二条后に通ったことが発覚して東山に幽閉されたためとしている。しかし「又説」として、又説云、年にまれなる有常が娘を、もとあだなると業平いひた

るが、あだならば、かくまれ成人をばまたじ、三年を待つたればと云也。返しの心は、あだになしとよめれどもさはなし。今日来りたればこそうつろはぬ色をば見申たれ。あすもきたらば、雪とふりたる心をも見んと云義なり。新枕すれとよめるにて聞へたり。

と「もとあだなると業平いひたるが、」と業平が有常娘を「あだ」と言ったという説を載せている。また、この部分に「新枕すれとよめるにて聞へたり。」とあるが、「新枕すれ」というのは第二四段の歌の一部であり、「又説云」という形ではあるが、「冷泉抄」が第一七段と第二四段とを有常娘のこととして一貫してとらえていると言えるだろう。

第二四段は、「知顯集(書)」には女性名の記述がない。「知顯集(書六・鳥)」「冷泉抄」「定家流」は有常娘のこととする。この段では男の詠む「梓弓真弓槻弓年を経て」の歌について、古注釈の間に三説に分かれている。「伊勢物語難義注(以下「難義注」)⁵⁾」は、この女性を紀有常娘(あこ)として、

むかし、おとこ、あ中わたらひへゆくとして、もし、みとせにかへりこずは、にい枕せよとい、をきていにけり。女みとせをまぢわびて、すでに、こよひにひまぐらしける夜、もとのをとこ来りて、かどをたたく。かどをばあけずして、うちよりこの歌をいはせけり。

という状況で、「あらたまのとしのみとせを」の歌が詠まれ、それに対して男が「梓弓真弓槻弓年を経て」の返歌をしたのだが、その男の歌を「いまにひまぐらのをとこ、つるのやうにひかば、弓のやうに、たをやかにして、したがひよれ」と、新しい夫に従いよれと解釈している。この解釈は現在の注釈と同じと考えてよい。しかし、

「知頭集(書)」では、「わがせしがごととは、ちぎりなり。うるはしみせよとは、ちぎりたがへたれば、かへりなんす。そのちぎりをもとのやくそくのまゝにせよ。とまらんといへる也。」と、婚姻関係をもとの通りにするよう求めている歌と解釈しているのである。「冷泉抄」の男の歌についての解釈は、

○我せしかごとうるはしみせよとは、かごとと云に、二の義。有常にはむつごと也。是はちかごと也。万葉云、千葉やぶる千々之神たちにかごとかけわれわすれめといもにいせよ とよめり。是は。やかもちが哥也。

というものである。この部分では、新しい夫にしたしむようという意でとっているのか、婚姻関係を元通りにせよと求めているのか判然としない。しかし、その後の部分の解釈に、

○と云て出なんとしけるとは、女のうけじとてこざりければ、業平出ていなんとしける時、女哥をよみてとむ

とあるので、業平は歌を詠んだ時点でまだ未練があったものと考えられていると考えてよいだろう。この男の歌については、「難義注」のように新しい男に親しむようにと解釈している古注釈もあるものの、「知頭集(書)」のように婚姻関係をもとのようにするよう求めていると解釈するもの、「冷泉抄」のようにこの歌を詠んだ時点でまだ未練があると解釈するものがあり、婚姻関係を元通りにするよう求めたと解釈する説の方が世阿弥当時はむしろ有力だったと考えられる。

また、「冷泉抄」は、この男が帰るのを女性が追った清水の場所を、○清水の有所にふしにけりとは、有常が家の前に清水の有所まで(つ、いづ、の場所也)追て行ども、とまらざりければ、そこに打臥てなきけり。

と、有常の家とし、また「筒井筒の場所」という書き込みがある。「冷泉抄」は、この第二四段を第三段と一貫してとらえていると言える。

「いたづらになりけり」の解釈は「知頭集(書・書六・鳥)」にはない。「冷泉抄」の解釈は、前述の片桐氏が紹介されたもので、有常娘がここで死んだのではなく、「いたむまじき顔」になったことを「いたづら」と言ったとするものである。この「いたむまじき顔」というのは、どのような顔であるのかやや不分明である。同じ冷泉家流に属する「十卷本伊勢物語註」では、

ソコニ徒ラニ成ニケリトハ死タルニハ非ス業平ノ振捨テ行ヲ見テ痛シキカホニナルヲ云也サレハ痛面也

と「いたづら」を「痛ましき顔」と解し「痛面」と漢字を当てている。この「痛ましき顔」というのは、有常娘が業平をとどめかねて悲しい顔になるという意で意味は通じる。「増纂伊勢物語抄」も、「十卷本伊勢物語註」と同じくいたづらを「痛ましき顔」になることととっている。「冷泉抄」のこの部分は「いたむまじき」と平仮名書きとなっており、この「冷泉抄」の祖となる本が「痛ましき」と漢字書きであり、いずれかの段階でこの「痛」を「いたむ」と読んで平仮名書きにしたために生じた誤写である可能性が高い。

対象とした古注釈の中で、第一七段・二三段・二四段を全て有常娘のこととするのは、「冷泉抄」のみである。『井筒』は「冷泉抄」もしくはこれに内容的に近い注釈書を典拠としたと考えられる。その「冷泉抄」では第一七段に第二四段と、第二四段に第二三段と関係する語が解説に用いられている。「冷泉抄」は第一七段・二三段・二四段を一貫してとらえていると言える。「冷泉抄」が前記の三段を一貫しているものととらえている以上、世阿弥がこの三章段を引

用するのは、恣意によるものではなく、有常娘の物語として一貫させる意図があったと考えてよい。この意味で伊藤氏の説を私なりに確認できた。また西村氏がいわれる有常娘に「あだ」な面があることも私なりに確認できた。伊藤氏・堀口氏・西村氏とも、第二四段で有常娘が死んだとして『井筒』の構想を考えておられるが、この段で有常娘が死んだとする古注釈はない。当時の観客は『井筒』に用いられていない章段・第二四段以降の章段の古注釈に記される有常娘像も、シテの有常娘に重ねて観ていた可能性がある。

三

前述の通り『井筒』は「冷泉抄」もしくはこれに内容的に近い注釈書を典拠としたと考えられる。但し、「人待つ女」という表現には「知頭集」の影響も考えられる。そこで「知頭集」「冷泉抄」が有常娘を業平の相手の女性とする、『井筒』にとられていない章段について、他の古注釈も参考にしつつ吟味する。

まず、第一段は、男が初冠して、春日の里に狩に出かけ、そこで見かけた美しい姉妹に和歌を送る内容である。「知頭集(書・書六・島)」「冷泉抄」「定家流」ともその姉妹を有常娘姉妹とする。まず「知頭集(書)」では、有常娘の性格について、

これも、さは業平、野にいで、かりしけるを、この女、なまいろこのむ女にて、きこゆる雲のうへのわか人のかりするさま
 まんと思て、しのびてまぎれてみるを、

と「なまいろこのむ女」と言う。そして、この有常娘は、業平を見て、

この女、この男をみて、かぎりなくめでたく思ひけれど、いつ

しか、すゝむべきにもあらで、心にかゝりつつ、返けるに、男のもとよりかくいひおこせれば、よきついで也、これにつき
 て、やがて返事せん、たゞにはあらじと思たりける也。

と好意をよせたとある。「冷泉抄」では、「かいまみ」の語釈として、「かいまみてけりとは、是に二の義有。一には、かきまよりのぞき見るをいふ。二には嫁の義也。業平有常が娘を嫁たりけるをいふ。」とここで業平と有常娘が結婚したとする。「知頭集」「冷泉抄」が第一段を有常娘のこととしており、他の人物をあてていないことは、有常娘が業平の最初に契った女性であるとしているという点で重要であると言える。

第一〇段は、男が武蔵国に行った折、入間郡の女性に求婚し、その男をむこにと考えた女性の母と和歌の贈答をするものである。「知頭集」「冷泉抄」とも男が求婚した女性を有常娘とする。「知頭集(書)」は有常娘の性格について、

この女は、かぎりなくなまいろこのみをたて、こゝろさだまらず。いろくしければ、なべての人にはさだまらず。いろくしきに思しりて、女の心のさがなきをも、思ひうとまぬ人なり
 けり。されば、この人ぞわがむすめをば思ひゆるしてみんずる。
 又、わがむすめも、この人にあひてぞ心もなをらんずると思ひければ、

と有常娘を「なまいろこのみ」と評している。そして業平がそのよ
 うな「心のさがなき」女をうとまない人物であり、有常娘の母親は、業平に逢ったならば娘の心が直るかも知れないと考えたとされている。「冷泉抄」は、有常娘の性格については言及していない。

第一八段は、「なま心ある女」が「菊の花のうつろへる」に和歌を添えて送り、男が返歌をする内容である。「知頭集(書)」は、「風

これは、ありつねがむすめと業平とすみわたりし時、たがひにしのびありきすとて、いろ／＼しき心のあだくらべしければ、」とあり、ここでも有常娘は「あだくらべ」をする女性とされる。「冷泉抄」「定家流」はこの女性を小町とする。

第一九段は、男が女性の所に通つたが、程なく離れてしまった。その男性の所に女性が和歌を送り、男が返歌をする内容である。「知頭集（書・書六・鳥）」「冷泉抄」はこの女性を有常娘とする。「定家流」は伊勢局のこととする。この第一九段の歌の贈答は、「古今和歌集」巻一五 恋歌五に「業平朝臣きのありつねがむすめにすみけるを、うらむることありてしばしのあひだひるはきてゆふさはかへりのみしければよみてつかはしける」という詞書で載る。この「古今和歌集」に歌の贈答が載ることから、この段を業平と有常娘のこととする古注釈が多いかと思われる。またこの段の女性については、伊勢物語本文に「また男のある人となむいひける。」とある。有常娘が「あだなる女」とされるのは、この「古今和歌集」詞書に有常娘とされる歌のある段の本文に「また男のある人」とあることも理由の一つと成り得るだろう。「冷泉抄」では、この「また男」を、「是は、彼女に、光孝天皇のいまだ親王にての時、通はせ給ひしにおそれ通はずといふなり。」と光孝天皇としている。

第二〇段は男が旧三月に「かへでののみち」に和歌をつけて女性に送り、女性が返歌をするものである。「知頭集（書六）」「冷泉抄」「定家流」がこの女性を有常娘とする。「知頭集（書）」はこの段を欠き、（鳥）はこの段前半を欠いて女性名に関する記述がない。「冷泉抄」では、この女性の返しを、「君はおもひはじむるといふ事はなきかと云也。」と業平が小町に心を移しているのではと有常娘が疑う歌としている。

第二段は「異心なかりけり」という男女のうち、女性が突然家を出てしまうという内容である。「知頭集（書六・鳥）」がこの女性を有常娘とする。（書）はこの段前半を欠き、女性名に関する記述がない。「冷泉抄」「定家流」はこの女性を小町とする。

第三段は「はかなくて絶え」た男女が和歌の贈答をし、男が「いにしへよりもあはれにて」通うようになるという内容である。「知頭集（書六）」はこの女性を有常娘とする。「知頭集（書・鳥）」には女性名に関する記述がない。「冷泉抄」は染殿内侍のこととする。「定家流」は小町のこととし、「異本」として、染殿内侍とする説を挙げる。

第三二段は男が「ある御達の局」の前に行く時、「よしや草葉よならんさが見む」と悪口を言われ、男がそれに返歌をする内容である。「知頭集（書六）」が「よしや草葉の女 ありつねがむすめ」とするのがそれに相当する。（書・鳥）には女性名に関する記述がない。「冷泉抄」「定家流」はこの女性を伊勢とする。この第三一段は、第二四段以降で、有常娘が登場する最初の段である。

第三三段は、女が男について「または来じ」と思っている状況で男が歌を詠むという内容である。「冷泉抄」「定家流」は有常娘のこととする。「知頭集（書）」はこの段を欠く。（書六・鳥）はこの女性を源登娘「てう」とする。「冷泉抄」では「○哥の心は、君に心のいやまさりておぼゆるといふ也。」とこの歌を有常娘を愛するという内容ととっている。

第三九段は男が女車に女性と同乗して崇子の葬式に行く内容である。「知頭集（書六）」「冷泉抄」が同乗する女性を有常娘とする。（書・鳥）「定家流」には女性名に関する記述はない。正式な場所に連れて行く妻として有常娘を挙げていることは、「知頭集」「冷泉抄」が

有常娘を業平の正妻ととらえていると考えてもよいだろう。

第四〇段は、親が男の思う女性を隠し、男が「絶え入る」という内容である。「冷泉抄」「定家流」はこの女性を有常娘とする。「知頭集（書六・鳥）」は仲平娘とする。（書）には女性名に関する記述がない。「冷泉抄」「定家流」では業平は有常娘を「絶え入る」ほど愛していると解しているといえる。

第四一段は、男が身分の低い男の妻となった自分の妻の妹に衣服を贈るものである。この段を有常娘姉妹のこととする古注釈は「知頭集（書六・鳥）」（書はこの段の記事を欠く）と「冷泉抄」である。「知頭集（鳥）」ではいやしき男は藤原敏行、あてなる男を業平とする。そして男が妻の妹に贈る「紫の色こき時は」の歌を、

わがつまを、たぐひなく、こゝろざしふかくおもへば、そのゆかり、みなあはれに、いとをしくおもふぞとよめり。むらさきの一もとゆへにむさしの、くさはみながらあはれとぞおもふといふうたのこゝろをよみたる也。

と妻を深く思っているので、その縁につながる妻の妹も大切に思うという歌と解している。「冷泉抄」では、業平の妻の妹の夫を小野夜人としている。「冷泉抄」も男の歌を「人ひとりがかゆかりに末々までもむつまじとよむ也」と解しており、「知頭集」と同じ立場であると言える。

第四三段は、賀陽親王が寵愛している女性に男が恋文を送る内容である。「知頭集（書・鳥）」が小町のこととし、（書六）はこの段を欠くが、同系統の阿波国文庫旧蔵本は「かやの御子つかふ給女小野小町」と、小町のこととする。「冷泉抄」はこの女性を伊勢とし、「或本には、有常が娘」という形で、有常娘とする説を紹介している。「定家流」は伊勢のこととする。

第四四段は、男が家刀自とともに親しい人の饞別の宴をするものだが、この家刀自を有常娘のこととするのは「知頭集（書・書六・鳥）」と「冷泉抄」である。このうち「知頭集（書）」は、送られる人を妻の妹とし、「藤原の敏行が妻になりて、尾張国へいきける時の事也。」とする。「冷泉抄」では、「紀有常が甲斐守にて下ける時の事也。」とする。

第五〇段は、「あだくらべかたみにしけるおとこ女」が、相手を浮気だと言い張る内容である。この段の女性を有常娘とするのは「知頭集（書六）」である。（書）はこの段を欠き、（鳥）は段の前半を欠いて女性名は記さない。「冷泉抄」はこの女性を小町とする。「定家流」はこの女性を伊勢とし、異本として小町を挙げる。

第八六段は、男女が互いの親に遠慮して、好意を寄せながら結婚しなかったが、その後同じ場所で官仕えをしたというものである。この女性を有常娘とするのは、「冷泉抄」「彰考（有常四女潔子とする）」である。「知頭集（書・鳥）」はこの段を欠く。（書六）は二条后、「定家流」は四条后とする。この男の歌の「おのがさまざま」は、本文の意によれば互いに別の人と結婚したととるのが自然であるう。しかし、「冷泉抄」では「○をのがさまざまとは、をのく／＼としのかさなる心也。○あひはなれぬ宮仕とは、共に清和の御門にかふるをいふ也。」となり、他人と結婚したとはされていない。

第八七段は衛府の次官達が業平の芦屋の家へ遊びに来るものだが、「冷泉抄」は「有常娘の知行あしやの里しるよしといふ。」という形でその芦屋の里を有常娘の所領としている。「定家流」では、みるを盛って次官たちに出し、歌を詠んだ女を有常娘とする。「知頭集（書・鳥）」はこの段を欠く。（書六）は「みるもりていだす女うつく」と歌を詠む女性を「うつく」とする。

第一〇三段は「まめに、じちようにて、あだなる心なかりけり」という男が、親王に仕える人に求婚の歌を送るものである。「知頭集(書六・鳥)」はこの女性を染殿后とする。(書)はこの段を欠く。「冷泉抄」は、この女性を伊勢とし、(或有常娘・或小町)という形で有常娘とする説を紹介している。「定家流」は段の一部を欠き、女性名に関する記述はない。「彰考」はこの女性を有常養子花子とする。

第一〇七段は、「あてなる男」のもとにいた女性に藤原敏行が求婚し、「あてなる男」が女性の歌の代作をするものである。「知頭集(書・書六)」はこの女性を有常娘(業平妻の妹)とする。(鳥)は女性名に関する記述を欠く。「彰考」は有常三女とする。「冷泉抄」「定家流」は初草女(業平妹)とする。

四

「知頭集」「冷泉抄」に有常娘の登場する段は以上の通りである。有常娘は『井筒』に用いられている章段よりもはるかに多くの章段に登場する。そして、業平と有常娘との関係は第一段の「初冠」・第二段の「筒井筒」に記される業平の幼少時代からの関係とされる。業平が妻とした有常娘は「あだ」「色好み」(第一段・第一〇段)な面があり、業平と契った後、他の男性が通ったこともある(第一九段)が、美しく、優雅な面があり(第一段)、また二条后に通ったことによって幽閉された業平を三年待つということ(第一七段)もあった。この時に他の男性と「新枕」をする(第二四段)が、そののちよりを戻し、第四五段では、業平はいやしい男にとついで妻の妹に、その夫のための衣服を贈っている。「伊勢物語髓脳」¹⁹⁾には、

一、ち、なりひらの朝臣、元慶四年五月廿七日夜半にいたりて、すでに心よはげにみえし時、ありつねのむすめ、まくらによりて、かほをあはせて、かなしびのなみだをながしていはく、君うせなむ後は、思ひのやみにまよひて、くらきよりくらきに入なむとみゆるに、よめる哥

しぬるあひだ(あひだ)はわれになれぬる世の人のくらきにゆかぬたよりありとは

と、有常娘が業平の臨終の際に立会い、業平から自分と契った女性に極楽に往生するという歌を贈られているとする。有常娘が臨終に立会い、この歌を与えられている記事は、「女合」にもある。「知頭集(書)」は、有常娘を業平の妻の第一に挙げ、その理由を

業平この道をたづねんとて、みちをならひえたりし事、この女にあり。されば、この女は、心つきぐさにして、あだをなす時もありしかど、恩をそむくれいなければ、廿余年かれはてざりし女也。よて、このうちにもらさじとかけるなり。

と、「あだ」であったが恩を背くことがなかったので二十年以上交際が続いたとする。但しこの「あだ」なる面は、古注釈の時代にも有常娘像にマイナスイメージを与えたらしく、「女合」は三番に有常女君(左方)を源氏の正妻紫上(右方)と番えているが、「此つがひ、左もすがたこ、ろのえんなるかたは、世になきさまに聞え侍るを、我ある山のと侍る言にいさ、かのふしをこめ侍る也」と、本文に「また男のある人となむ」とされる第一九段の男の歌を引用し、有常女君を負としている。

このように考えると、世阿弥が『井筒』を書いた時の世間一般の人の有常娘像も、やはり前述した通りの面を持つ「業平の正妻」であったに違いない。世阿弥が『井筒』に採用した段のみにしか注釈

のない古注釈に基づいたとは考え難い。世阿弥は、古注釈のもつ有常娘像のうち、業平と幼なじみであったこと、三年もの間「人待つ女」であったこと、それだけを選んで『井筒』に書いていると考えてよいであろう。世阿弥は、古注釈の描く有常娘像から「あだな面」、「正妻」の面を除き、「幼なじみ」「待つ女」として造形したと言えるのである。

『井筒』の室町時代の演能回数は、『能楽源流考』⁽²⁰⁾によれば二七回であり、成立時から途絶えることなく上演され続けてきたと考えてよい。『井筒』成立後ほぼ半世紀後の成立となる『伊勢物語宗長聞書』⁽²¹⁾は第二三段について、「人の子ども、男は業平、女はありつねがむすめなり。貞女なるゆへに名をあらはず也。」と、有常娘を「貞女」とする。これは、世阿弥作の『井筒』が有常娘の「待つ女」という面を強調して描き、有常娘像の「待つ女」という面が世間に浸透した結果、「伊勢物語」の旧注に影響を及ぼしたものと考えることもできるだろう。

注

- (1) 『謡曲集 上』日本古典文学大系 岩波書店 昭和三五年一二月補注一五〇 P 四四七
- (2) 『井筒』―作者と本説―香西精「観世」昭和三八年九月号
- (3) 『伊勢源氏十二番女合』『伊勢物語の研究(資料篇)』片桐洋一著 昭和四四年一月発行 明治書院 P 七六―七九
- (4) 『謡曲と伊勢物語の秘伝―井筒』の場合を中心として―伊藤正義(金剛) 六四号 昭和四〇年五月
- (5) 「待つ女」―井筒』の手法』堀口康生「図説 日本の古典5 竹取物語・伊勢物語」所収 集英社 昭和五三年八月発行
- (6) 「人待つ女」の「今」と「昔」―能『井筒』論』西村聡 皇学館大学紀要 第一八輯 昭和五五年一月
- (7) 『伊勢物語の新研究』片桐洋一著「第四章 虚構の実伝と物語」三二

明治書院 昭和六二年九月発行 P 七五

- (8) 「和歌知頭集(書陵部本 卷二一五)」同注3 P 二五―一八六
- (9) 「和歌知頭集(書陵部本 卷六)」同注3 P 一八六―一八九
- (10) 「和歌知頭集(高原文庫本 卷中・下)」同注3 P 二一八―二八六
- (11) 「冷泉家流伊勢物語抄」同注3 P 二九三―三九九
- (12) 「定家流伊勢物語註」長尾一雄「国文学論叢第三輯 平安文学 研究と資料」至文堂 昭和三四年一月発行
- (13) 「彰考館本伊勢物語抄」同注3 P 四〇三―四三九
- (14) 『謡曲集 上』同注1 P 二七四―二七九
- (15) 「伊勢物語難義注」同注3 「一、あづさ弓といふ事」P 四六九―四七〇
- (16) 「十卷本伊勢物語註」『鉄心斎文庫 伊勢物語古注釈叢刊 第一巻』片桐洋一編 八木書店 昭和六三年一月発行 P 六一
- (17) 「増纂伊勢物語抄」同注17 P 三三八―三三九
- (18) 「古今和歌集」小沢正夫校注 日本古典文学全集 小学館 昭和四六年四月発行 七八四番 P 三〇二
- (19) 「伊勢物語髓脳」同注3 P 四四九
- (20) 「能楽源流考」能勢朝次著 岩波書店 昭和一三年一月発行 P 三〇一
- (21) 「伊勢物語宗長聞書」同注3 P 六七〇

付記 本稿は、平成三年七月の名古屋中世文学研究会に発表させていただいたものをまとめたものである。席上多くの先生から貴重な御助言を賜った。村上学先生からは、二四段の解釈について、冷泉家流の注釈である「十卷本伊勢物語註」「増纂伊勢物語抄」に「冷泉抄」と異なる記述がある」と書簡で御教示いただいた。記して感謝申し上げる。又、宮内庁書陵部には、貴重な「冷泉抄」の閲覧を許可して下さいたことを心から感謝する。